

新撰
名卷
發句五百題集

中村右年編

乾



中村太年 編

新撰 名譽發句五百題集 冊二

東京 柳翠園藏板

序

夫詩法事多矣其地也云云
詩のふたふたといふ之のふたふた深本
阿そ百人百包のまゝむを扱ふ
俳諧の新舌を張を拵する事
やぶらゝりんをされ撰類と深き事
る加減を考へたりふのまゝとて
さうに阿れをも見下り見上り亦
あゝむをとりてあゝむを明と

卷中目録

○ 春の節

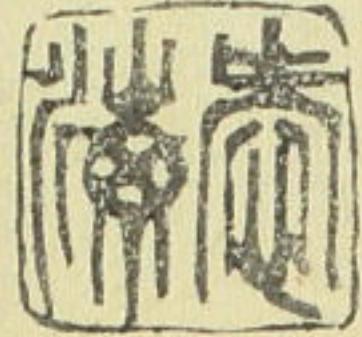
花	さくら	初花	初雪	糸梅	連梅	一月一日
元日	年立	立春	初旭	春梅	うす初	初霞
西暦	年終	やま	玉の層	紅梅	うす初	うす日
大け	蓬萊	吹ひ	春梅	うす初	うす初	うす日
巻初	初夜	春霞	古方	紅梅	うす初	うす日
羽子	雛杖	福寿	子孫	七種	春霞	春霞
左義長	あし	雷祥	凍解	源久	春霞	春霞
陰雪	鼓春	初花	初霞	春霞	春霞	春霞
春の小	春のあ	春のあ	春のあ	春のあ	春のあ	春のあ

目一

如くは海如く唐州をくわす如く海嶺の
 名満きくは風嶺の嶺如くは海嶺の
 左義長老人如く唐州をくわす如く海嶺の
 阿多れくは海嶺の嶺如くは海嶺の
 如くは海嶺の嶺如くは海嶺の
 下り如くは海嶺の嶺如くは海嶺の

明治十年年終秋

春霞の巻



卯辰	初命	常規	今の象	古新	小来	左	梅種	有柳	風光	英の
	必海	多船	ふ自	所の子	古代	此	幸有	木の	海若	未の
	子解	多船	山	田	と	つ	枕の	核	う	古
	少平	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島
	海	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島
	海	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島
	海	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島
	海	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島
	海	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島
	海	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島
	海	海	山	引	旗	東	海	柳	緑	島

合計百五十二款

○夏の間

子規	浮葉	蠅	羽	和	短	海	痛	夏	初
老	浮	蠅	羽	和	短	海	痛	夏	初
ト	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅
切	幅	幅	幅	幅	幅	幅	幅	幅	幅
采	花	花	花	花	花	花	花	花	花
子	花	花	花	花	花	花	花	花	花
初	花	花	花	花	花	花	花	花	花
花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
花	花	花	花	花	花	花	花	花	花

豆探汗	土用土用年	一巻海	冥	ふたり手	夏の旨																	
中少古	管	抱籠	竹	幽人	細涼	冷蒸	青	心	古													
打	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜													
日	華	官	被	川	持	多	葉	若	楓	新	楊	花	西	合								
玄	有	立	つ	系	相	好	と	実	楓	推	の	色	葉	物	柚	の	色	葉	の	花		
合	秋	葉	柿	の	花	石	り	紅	杜	多	牡	子	菊	茶	物	柚	の	色	葉	の	花	
赤	の	色	葉	の	花	竹	の	子	初	菊	子	菊	子	菊	の	花	百	合	清	宵		
紅	の	花	多	菊	子	橘	一	八	初	秋	赤	の	花	百	合	清	宵					
中	少	秋	葉	柿	の	花	石	り	紅	杜	多	牡	子	菊	茶	物	柚	の	色	葉	の	花
竹	の	花	多	菊	子	橘	一	八	初	秋	赤	の	花	百	合	清	宵					

合計百五十五歌

○秋之秋

名	月	見	月	初	月	約	宵	十	六	衆	后	の	色	葉	の	花
龍	田	那	文	月	葉	夕	立	秋	七	夕	下	の	竹	秋	の	系
好	夕	袖	接	結	言	燈	籠	喚	籠	足	送	火	認	柳	葉	葉
生	牙	總	や	り	西	瓜	花	火	紗	吳	お	撲	秋	丹	花	涼
置	扇	換	意	高	ま	紅	露	露	露	露	露	露	露	露	露	露
不	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪
故	生	云	吟	子	葉	の	子	引	板	露	水	露	船	露	水	露
い	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く
新	秋	の	花	葉	の	子	引	板	露	水	露	船	露	水	露	露
秋	の	花	葉	の	子	引	板	露	水	露	船	露	水	露	露	露

本ノ實	栗	柿	熟柿	木菓子	葎柿	おくら	菜畑
茅草	紫苑	水引草	枯枝	名袴	ゆい	男一	新倉
芙蓉	萩	生世	萩	疋	荻	尾花	
野菊	白菊	木賊	糸瓜	瓢箪	瓜	菊	
菊	葱	枯枝	荻	茶	木	藜	梅
木松	き	蒲	葉	桐	秋	秋	秋
秋の楓	秋の松	秋の松	秋の松	秋の松	秋の松	秋の松	秋の松
楓	い	葉	葉	葉	葉	葉	葉
さ	石	葉	葉	葉	葉	葉	葉
鴨	鴨	鴨	鴨	鴨	鴨	鴨	鴨
鴨	鴨	鴨	鴨	鴨	鴨	鴨	鴨

合計百六十名

○おの部

さ	雪	ゆき	雪	雪	東	強	費	初	時	る	一	ら	雲
鹿	初	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿

目四

河	有	香	葉	漢	玉	海	華	出	垢	酸	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴
皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴	皴

合計万甲三款
 甲刻之抄計六三十二款

卷中作者居圖

西京芥金福受

山城為章

大坂御水味美如水南歌

尾張川西素溪三桃醉有野受ふ区祖康

之河蓬宇

幸江十御我蓑中董松庭秋峰撰拙畔成句号

詭河古其溪乙其久為生名此有本波蓬月老

不其有里其之其太冲大常河此保梁清民月老

甲發中衣手振左兵才松一御不辨煙池

居一

桂圃夏史如華廣拙

伊宜連名之友

相橫奇乃

去 錄 一 深 坪 一 辨 一 烟 一 味 一 美 一 智 木 輕 丈 竹 弓 物 內 雄

青 黃 一 處 府 一 理 一 存 一 清 一 風 一 味 一 智 木 輕 丈 竹 弓 物 內 雄
史 宋 一 一 夜 清 一 往 一 素 清 一 翻 翻 之 可 竹 輕 丈 竹 弓 物 內 雄
文 本 一 一 文 往 一 往 一 素 清 一 翻 翻 之 可 竹 輕 丈 竹 弓 物 內 雄

安 房 旭 日

上 孫 蘇 堂 奉 汝 親 高 梅 含 理 凡 一 耕 益 馥

下 孫 芳 湖 風 石 鈔 抱 梅 確 寮 和 上 系

常 佳 不 碎

上 聖 乙 心 幾 弓 游 蓬 堂 一 濤 可 系 造 堂

下 聖 幾 精 對 象

陸 奠 承 水 生 居 沙 小

羽 後 喻 風 二 葉 弓 木 韜 臯 素 山

近 以 早 乙 如

美 德 清 泉 全 可

信 德 庭 向 探 卷 如 一 壽

裁 後 旭 高 千 丈 弓 曉 鐘 講 靜 山

古 修 風 輝

備 後 梨 夫

伯 若 黃 考 韜 橋 小 玉 文 兔 梅 旭

出 雲 曲 川

名之清月旦素冰貫梅乙冠先花血粟の如寧晚是久暢
 令華之聖担侍有榮林子艾流枝為自控蒙外海養禮字
 美余半の古初世蓋未嘗寧臨乞請隨後翁宋佳高進森
 由忠山笑年心乃草化必我相登為心身蘇尔益女胡醉
 甘秀那望江壽壽美語孤家仙色在上史靜其竹芦太壯
 翠蕉川溪浦多逢系交山松考富上理正和膏集六送象
 兔雲芝竹保靜头月碩如雷席破海七古之五史瑞冥畔
 月園倦僻多水白石之如輕趨松為確如書麓包限於文
 里之知不十新素戈冬松高一星一桂蓋仇宮暮曉年古
 梳戈家醉秀醉抱暖病地垂村物植歌勢類竹字空可涉
 月好連茂仙心五松連武由之之青醉美七翠葛似年弘
 丸外山翠屋字唇の之依丈担休集月心雲子好系古美
 好之句梅聖海及左美風為龜宗梅雷如寶我美龜枝秀
 交寄坡園川和聖梅智為外心阿病丈心來宗良抱の系

東 橫 札 第 小 護 不
 京 濱 幌 館 竹 唐 見
 六

畔聖曉存古卜吳詢
 交窟魚長詩早仙松
 畫葉梅月右精梅枯美
 堂多雲波取之舟下湖
 五最甯皆梅予子字尋
 詩弱山松磨堂前山岳
 杉美靜翠竹竹月芳水
 而色極集石史產家機
 中嶺臨朝支是宮第素
 成崇月城為富塔水水
 梅年之一喬松五松營
 素確豪秀慈治向確笠
 梅踏共キ翠襪詩蘇榮
 奕錢寶以蓬一竹燈確
 左助坊 齋右 梅 柳 南 太 華 鹿 苑 瓦 抱 玉 梅 右 后 曉 梅 碎 友 分 雷 函 柯 多

古今

一弘物古甘文古月念後旧祖初
 具物外外海路海外くお人翁
 由万境後未仙寄西古流心梅
 筆子に筆曉相心冷心其外室
 知部以去弓一乙野在視余養
 岡梅考子泉保雄杖史口即如
 士清市況五嘉木弓天最為西
 郎民橋車浪豪勢皆休左心弱
 士九海一愛抱如一略西乙
 帝起了飲心候什止成馬乙
 梅西雪然乘途引刻逢而心
 裡羽飛池球産隣高象命隆
 春系月新弓佳智心多弱不
 屋芸波浦院年心右少郎平

新撰
 後勺玉百類集

春乃部

藤廣 右年 編
 一具 茂 尋 岳
 宋 橋 園 筆 雄 校

花

江の花也さほま物そ潮より
 花あらし風空りぬ新の如
 空の中のおやせきうらまゝ和
 せまもさすゆまの島の中へ丸
 ささか〜とせまのまのま〜め
 夕さぬ風あ立寄り花の時
 春 湖
 永 操
 香 笠
 露 屋
 浪 足

静くある花や 外枯の床のり
降ともよめる花や 花はさく星
花はさく星はさく星はさく星
あまはぬ花のさく星はさく星
降やあは夕よりあまはぬ花の雪
花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星
あまはぬ花のさく星はさく星
我は花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星

踏橋
堂海
下早
蓬雪
知来
文種
之友
うさ
嗣堂
吾松
新南

花のさく星はさく星はさく星
あまはぬ花のさく星はさく星
降やあは夕よりあまはぬ花の雪
花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星
あまはぬ花のさく星はさく星
我は花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星
あまはぬ花のさく星はさく星
降やあは夕よりあまはぬ花の雪
花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星
あまはぬ花のさく星はさく星
我は花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星
花のさく星はさく星はさく星

雪系
踏橋
一
理丸
晩香
キ
梅雪
富山
寧和
静推
片

さくら

人無一燈より一灯の夕さくら
暁のよみひよ木いまきく山橋
人埃り流るる都のさくら
我ものやうよをむ教さくら
橋歸と沸ききいなるり
夕さくら山をさくらむし中り
さくらと流るる許えいさくら
種播の種あきらむ一ちる梅
夕さくらやさくらを廟。船り
常も知れぬはさくらをうめ

心雄
長蒲
浪見
六洞
初来
益山
蓋取
おん
有木

初夜

書をむく書さくら
吹き風と過るる
三つさくら梅さくら梅さくら
さくらさくら梅さくら梅さくら
初夜
初夜
初夜
初夜
初夜
初夜
初夜
初夜

書心
晴月
度屋
之橋
鳥香
浪見
手電
法書
理丸
何あ

とらむ也部のふも 初めあり

貫夜

けり梅

出さるる日ひさしなればけりさる
山内我音まの宿 初はる
橋やや 押り去るこまを梅
美ひのこころ 痛あり 神や
身 幸を清し合より初梅
よひなまきふたの樹をけりさる
唯 唯とけりこまを梅
けりさるの宿はや 一 一 一 一 一 一 一 一
是はけりさるの宿はや 一 一 一 一 一 一 一 一

妙木
梅地
雪戸
雪野
之直
木
斗大
暖集

系さる

秋の女たちより系さるり
けりさるるこまを梅

系湖
系翁

進梅

けりさるるこまを梅
こまを梅の宿はや 一 一 一 一 一 一 一 一

古年
竹丈

歳旦の初

一月

一月と色こまを梅の宿
一月の中を梅の宿
けりさるるこまを梅
一月の中を梅の宿

等裁
雪野
雪野
雪野

一月也春をけし暁の音あり

半松

一日

河をわたるとわたりありて
下りてわたりてわたりて

美色
竹交

之

之のやうにふしあかしのまの
えりやうにふしあかしのまの
えりや四角の是れあかしの

桃葉
一晴
高屋

年立

少くも春をけし暁の音あり
茶大松やうにふしあかしの

梅年
桂を

とくも春をけし暁の音あり
年たつやうにふしあかしの
呂歌やうにふしあかしの
左やうにふしあかしの
神のやうにふしあかしの

春
竹良
浪足
機一
坊成

はつ

中春をけし暁の音あり
はつやうにふしあかしの
神のやうにふしあかしの
はつやうにふしあかしの
はつやうにふしあかしの

山藁
梅年
半古
半古

初日

所ちむまの書拭きし初日
相うけの戸に障子けり
貴殿のまの書に初日
神佛のまの書に初日
さへ波やまの書に初日
新わりの初日
右たりの初日
志しとる初日

素溪
有木
素水
高屋
浪足
巻海
秋峰
秋洞

すん物

初物やまの書に初日

半古

すん物

すん物の初日
すん物の初日
初物やまの書に初日
初物やまの書に初日
初物やまの書に初日
すん物の初日
すん物の初日
すん物の初日

浪足
唐拙
角あ
大年
高梁
松屋

おのやをゆふき初物
啼連き 内の一羽やまら物
まきしきあて耳にげんうす

翠葉
機一
宿屋

しらたあ 四のゆふきあしねと初あ
しらたあ前あしとあふあ
おのあしあしあしとあしあ
榊木のまきしきあしあ
海のまきしきあしあ

浦木
有木
榊屋
香栞
花野の

あまあ 水ぬまのしきあしあ

浪足

あまああ 梅のまきしきあしあ
あしああ 梅のまきしきあしあ
あしああ 梅のまきしきあしあ
あしああ 梅のまきしきあしあ

右甫
杏堂
新甫
久あ

あしあ 梅のまきしきあしあ

五抄

あしああ 梅のまきしきあしあ
あしああ 梅のまきしきあしあ
あしああ 梅のまきしきあしあ
あしああ 梅のまきしきあしあ

浪足
成居
祖康

年程 年程もあしあしあ

梅雪

吾輩のくはに満きて日初下弦
品少くも年程長くあつく
うけよと官の事傳り初者哉
年礼や初年より人の能

素秋
二友
初成
素秋

や

年玉や山家の人は誠なり
や

我輩
初成

初曆

手子ととも花の多しとる者曆
はつ曆をたるととるなり

初曆
素秋

人の見の間を待たて初

初曆

初曆

梅乃くは年白くありとる者
初種ありはとる者

素秋
初種

初

おまの初はとる者
大切初

素秋
初種

二日

何より初つとる者
初種ありはとる者

素秋
初種

ある人のおもしろいところ
を流しやうとて流しこす

松嶋
梅実

難老

可立の孫あり流し難老哉
好姑むすむ語りさうに
膳もあやうし難老引難老
喉の人の難老一さうに
ひさしあやうし難老難老

尋美
浪足
足勢
時美
相持

太笨

太笨北木あの中をひさし
甲とけりも太笨は流しこす

素更
暢亨

ちげーいさうに置候うか

浪足

蓬萊

蓬萊まはれぬむつり敷うま
ほうらひや府中の時流す
蓬萊のうらひる家の富
蓬萊は孫ふ梅のとくさ利
あう孫いや其らあひ千年
蓬萊まはれぬのうらひ流し

黙平
申古
翠美
酔外
大路
乙瓢

浪流

浪流ぬ先津柿の雪や一記
浪流やうとて出ぬい愛か人

中右地
申古

啓蘇

啓蘇のまじり種とくく山我
そくくよやまをたさるる物のみ
我子よ、種のとくく啓蘇甲ふ

浦木
杉百
杉成

小一若

小町田のつ粒えりやこ一若
穀の子よおききとらひ中一若

清氏
正才

門松

つねやうらぬせよひをたのめ
門まのまき種とくくまの嶺まに
つねま種一日のつげ月のの希

信丈
杜兼
素水

飾

ハ束種の長さをはれや飾り葉
色をぬき葉も飾のこもり葉
唐ふくや家飾り節一ほき飾
あふしほりと雪のうらぬまのほり
子刈のうらや一まおきをり葉
飾りまきや飾り掛おくさる種

精如
唐屋
等哉
畹文
宇山
成石

枳の内

雪を唐の種ひまほり枳の内
とくの子へ持つきとあふ枳の内
と種ぬまきり葉のうらや枳の内

枳内
五起
九起

波白のふちぬ調をんまのめ

高屋

去初

去るもや何なる所れ局より

精初

書初やのけしやぬいりけ

書布地

唇を深るも不化ぬ書けり

一可為

ふり積りよ縁かきり書てしめ

高竹

親よりりまもふくくは筆始

蓬亭

しらま

しらま城つや花くく心ま

五勢

初よりや左書る物態不この心

畔文

初の色やう一室のさる浪磨の松

喰風

左寤

相乗葉まの程ひまを左寤

左助坊

のりまるとたまじ若や左寤の心

古方

群よりまき古方也小梅柳

蓬亭

追々来る程はむのふ古方也

浪足

角力場を東西くとも古方也

高屋

出定時古方すてまをなうし免

古海

娘の笑

軍の竹よけや母をう娘の笑

弘美

担引

はる奥や吐くあゝは唄宿子
担引やあしきあまのてはし

あま
古歌

あ糸

あ糸のりきとゆききそるりき
あ糸やあまうけはまろくそ
古たやあ糸あひりりりりり
一ふすとあまもあ糸あひり
あ糸あやうりり向あ糸あひり

梅素
眠石
蓮子
古歌
あま

糸鞠

あまのあまのけりむ糸鞠
糸鞠うたあまのあまのあまの

きり
あま

あまのあまのあまのあまのあまの

浪足

羽子

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

杉百
古歌

粥杖

粥杖やあまのあまのあまのあまの
粥のあまのあまのあまのあまの

清韻
あま

福寿草

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

子麻
あま
あま

四五寸紙張るる片もあらず
と物候てほろも思世に福寿あり
去るより此書自身に物もあらず
東家あり思世の福寿あり
暁時の心も東家候物もあらず

汝心
五神
文徳
古年
茶亭

子母

少和引聖ま思まきり 畑の心
振あもたふあることら子の心
引はる小和の重を袖あも
四時の心もいりや 初子母
今もいりていり 少和ひき

世の心
月夜
半心
為心
為心

七種

七種や 兼も種も四の心
七種もいりていり 山家もいり
七種やいりていり 引はる心

我種
兼あり
五神

七種

たつうー知るも七種の心
振あもたふあることら子の心
物もいりていり 七種の心
推あもたふあることら子の心
目もあもたふあることら子の心
四つもいりていり 七種の心

蓮亭
一海
益山
兼種
可子
余心

買少とくし 穠く 謀の 五葉を 取
有 終りて 五葉 け 七 若 老 手 振

之友
葉解

たうま
蓄 打 掃 まま 元 何 け ち 布 け
即ち 色 を 籠 へ 更 なる 蓄 丸

浪足
首歌

花字
入 舟 ち 其 ち ち 花 ち ち ち
田 中 畑 へ 高 へ あり ち 花 字

甘實
浪足

左義也
く 少 じ 是 ち ち 中 ち ち ち ち ち
や ち ち 葉 ち ち ち ち ち ち ち ち

連水
葉高

中々
如 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
右 更 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

船高
年雄

雪解
雪 解 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
竹 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち
五 花 の 水 ち ち ち ち ち ち ち ち

北扇
清氏
年雄

凍とけ
凍 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
凍 解 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち

浪足
教お
右邊

海五子

海くろくを思ふ新の春
海五子月おあけや猫の裏
ささくの家は移苗をうらみ

実物
子お
梅実

春の寒

酔ふをうらみ春の寒
ささくの家は移苗をうらみ

小玉
子お
海思

余を

にふる春の寒もや海思の新
ささくの家は移苗をうらみ

少玉
ら来

おさくの家は移苗をうらみ

鶯笠

春の雪

春の雪もよの夜の寒
伏さくはる田舟の影も雪
おさくの家は移苗をうらみ

古妻
子麻
三友

海ゆき

海雪や子のうらみの少
海雪や揚屋や出る小
海ゆきの海は移苗をうらみ

十郎
美色
梅実
まこ

彼国

花より木の中をわたり彼国
彼国より心の中をわたり
心の中を重なる心の中
心の中を重なる心の中
心の中を重なる心の中

源輝

源輝

源輝

源輝

源輝

涅槃像

一輪の心も涅槃の心
枝は心の人よさけりねえ
心の中を重なる心の中
心の中を重なる心の中
心の中を重なる心の中

源輝

源輝

源輝

源輝

源輝

しらね

しらねやあくしを撫ね人
けりねやしそ子ねひの海雲
しらねはけりねやあくしを撫ね

源輝

源輝

源輝

初雷

しらねやあくしを撫ね人
けりねやしそ子ねひの海雲
しらねはけりねやあくしを撫ね

源輝

源輝

甲

しらねやあくしを撫ね人
けりねやしそ子ねひの海雲
しらねはけりねやあくしを撫ね

源輝

源輝

源輝

春の定人の見よとわいのたより

菅笠
右座

出代 出うけりや美なき舟の物急き
出代や里や舟の可招の舟

理丸
丸く

信保船 信保船の影も定りぬきし浪
さほよめの船もやうく小ね系

畔本
春の

けの心 春の心とるその人や春の心
心とる人の心とるけの心

月波
矢三

常 常は海に流るる春の山
下りあかぬあまよ春の山

馬松
旭扇

春の海 潮も春の山平く春のうら
理まを船の山よす春の海
うらまを海に流る春の海

一瓢
里物
水

春の水 春の山石の山よ流る水
さうまを流る水よ春の水
けの水曲る水よ水りり
又うらまを流る水よ春の水

梅香
梅香
春水
浪足

春の女丹波の若の海へ鹿
人よき少く海へやうと春の水
てしけくもあつたまふかまたのち
春の女をまほしく流れり
踏くまへに流海へやけりかみ

清氏
之友
松隆
一扇
為心

春の女

春の女の味ひ初ぬあし
松葉のくちを鹿よかたに春の女
解けりあはれぬ世にけりか
甲とてとてあしけりか
やうに初ぬあしを

春屋
其屋
其屋
其屋
其屋

春の女初ぬあし
春の女初ぬあし
春の女初ぬあし
春の女初ぬあし
春の女初ぬあし

舟又
浪見
卜早
兼隆
士安

春風

春風吹く中のうらみ
ひらきと春風吹く

月雄
石橋

春の女

春の女初ぬあし
春の女初ぬあし

子麻
上理

春の夜やせしむ一松敷垣
まらむをそらやふもふも
春の雨の中押入るは
清の雨の中出るは
新しき年の白く春の雨

精知
蘇翁
如東
瓦玉
清彦

弥生

手枕のうせはくやや海生を
田の水のや遊を身や心
町を山を常をまらむ海生を

旭扇
淡島
芦之

春日

花の香る春の朝や
地振り土ていつくまらむ

成路

身はらむまらむ海生を
春の夜や遊を身や心
春の夜や遊を身や心

西馬
蘇翁
古曉

春の夜
春の夜の清くまらむ
春の夜の清くまらむ

千麻
精之

春の月
鈴をくしむ海生を
汐の春の月
春の月
春の月

素水
之根
清民
稔頂

入る灯も出る燈あり春は月
其の月智の病さうこのをさう
歌あり磯列し松春の月
春の月木影踏るる白ひき
若くは木のしそく出る春は月
松ありさうさぬははははは
仰むけいさくあやあやあやの月
長きと思ふ松やさ家の月

左岳
舞中
樵雪
梅素
月辰
蓬雪
太平
白号
中岳
浪足

中岳

のしそくや 雪は降るし 夕烟
中岳と海と山とを色けし

世々
松の影は山影の影を
長閑さや松の影をひきかき

月木
松旭
赤水
梅実

うりの
雪やあさうはらきを取りん
雪やあさうはらきを取りん
うらうらと松の影をひきかき
松の影をひきかき

赤水
梅実
梅実
梅実

あさか
暖まのゆき 柳を子に雪ひらり

一
瓢

ぬき身了ん(暖)始やう
暖や候へる候へて拭ひ候

釣糸
旭庭

河を

河をわたりてあそぶ白のこ
河をわたりてあそぶ白のこ
うけりし書物の遊ふ烟のた
あそびのたのしみあつた
河をわたりてあそぶ

茂林
富永
疎白
梅実

山を

山をわたりてあそぶ
山をわたりてあそぶ
山をわたりてあそぶ

氣山
兜首

日永

日永のついでに
日永のついでに
日永のついでに

永核

日永のついでに
日永のついでに
日永のついでに
日永のついでに
日永のついでに

葦原
桂子
豊外
美色
梅実

水光

水光のついでに
水光のついでに
水光のついでに

雪戸
柳糸

海苔

山家月夜海苔のけあり焼く海苔
物白き海苔は海苔の味
汐のやうな海苔の味は海苔の味
かゝる身は海苔の味は海苔の味

素十
海苔
海苔
海苔

うす

海苔の味は海苔の味
山家月夜海苔の味は海苔の味
物白き海苔は海苔の味
汐のやうな海苔の味は海苔の味
かゝる身は海苔の味は海苔の味

海苔
海苔
海苔
海苔

朧月

舟を曳きし海苔の味は海苔の味
水は海苔の味は海苔の味
海苔の味は海苔の味
海苔の味は海苔の味

海苔
海苔
海苔
海苔

朧

舟を曳きし海苔の味は海苔の味

海苔

梅

つる程の枝重みより梅の花
梅咲く一雨心一庭のや
くお子て逢ふと人言ふ梅咲
内かへまもゆふ多し梅の梅
梅うの以をへゆや笠のうお
白く澄れ露よのまを梅の
新婦よりあまを香の梅を
回をあふとさうと人言ふ梅の花
老く風を吹くさうと人言ふ梅の花
こころを梅の心ありと人言ふ

潮多
乙瓢
之友
一素
三根
相宗
呂木
水桑
浪足
寸根

東よりや月を言ふ梅の花
くま家やゆめの物と梅の花
梅は花を言ふ言ふに花より
梅を言ふ言ふに花より梅の花
物言ふ言ふに花より梅の花
う梅を言ふ言ふに花より梅の花
梅切を言ふ言ふに花より梅の花
物言ふ言ふに花より梅の花
梅の言ふ言ふに花より梅の花
言ふ言ふに花より梅の花
梅を言ふ言ふに花より梅の花

梅外
相宗
古寺
素宗
梅香
清泉
原水
物壽
白隣
六洞

糸の海より一葉の梅の花

露屋

梅や如き

為く出さる雲も好まぬもの物
いづれある玉川を梅や如き
袖垣より一葉の梅や梅柳

清民
飛遊
キ江

柳

海山北首をわたり柳を
中風葉をわたりし柳の柳や
池よりけりし柳をわたりし柳
伸りの糸口是ゆるやめをわたりし柳
わたりし柳をわたりし柳

青溪
駒変
馬山
益山
雪柳

青柳

より富まるるをなみの柳の柳
何れよりし柳をわたりし柳
柳の柳をわたりし柳
咲いぬをわたりし柳
柳の柳をわたりし柳
柳の柳をわたりし柳
柳の柳をわたりし柳
柳の柳をわたりし柳
柳の柳をわたりし柳
柳の柳をわたりし柳

露屋
柳又
梅年
之友
柳又
文程
乙亥
言外

寸松
浪足

木

新撰し年のはを初る木は是れ
編りしは念入るる木はの如
病く初ぬるは木の是れ
存之旭のまゝを伸る木の是れ

辰

一

瓢

浪

流

土軍ふ番ふのまゝ赤核
日のまゝは腮まゝは核丸
風まゝは日まゝは核丸
白の核おふは核丸
木は是れに更なるのまゝは核丸

赤

核

丸

白

核

耳の向。般もあらん核丸のけ

金

旭

日

相

門光やま砂踏ひの相光
経る年は核丸のまゝは核丸
眼まゝぬるのまゝは核丸

相

光

踏

下

下前や新撰のまゝは核丸
下前まゝは核丸のまゝは核丸
下前や新撰のまゝは核丸

下

前

新

去るもさるもあはれに白の下
下向やあはれうききりしと花
下向やはあはれうききりしと花

浪見
系詞
梅實

若草 若草はあはれうききりしと花
あはれうききりしと花
あはれうききりしと花

系詞
豆木
若草

春のま 見せしうききりしと花
あはれうききりしと花
あはれうききりしと花

系詞
雲平
柳字

子梅 子梅はあはれうききりしと花
あはれうききりしと花
あはれうききりしと花

系詞
逸詞
信濃
佳句

接種 接種はあはれうききりしと花
あはれうききりしと花
あはれうききりしと花

一帖
若草

辛夷 辛夷はあはれうききりしと花
あはれうききりしと花
あはれうききりしと花

守勢
若草

活少くは...の思ゆ...命系

浪見

柳のそ

沙市を...の柳のそ
柳のそ...
海...
柳...
雪...
柳...

潮
竹葉
松蓬
史風
杉雨

海棠

海棠...
海棠...
海棠...
海棠...

芳子
以月
富子

茶のど

茶のど...
茶のど...
茶のど...
茶のど...
茶のど...
茶のど...
茶のど...
茶のど...

茶好
茶更
水集
旭扇
浪見
露屋

露の草

露の草...
露の草...
露の草...
露の草...

弓

里新
舟の
志水

茶苗

茶苗やせと胸せ一併のまほ
さく苗や籬を植るうらり楮
茶苗や袴のまうて 秋まひ

五明
清民
梅香

茶

初りの成たるの好みの茶葉を
娘の目のつきあきよめ茶が

左助坊
年雄

茶

茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶

信光
益山
吉宗
卜早
清民
梅香

茶

茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶

吉宗
浪兄

茶

茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶
茶摘一あよ七茶のまれ茶

卜早

石まきつゝしとて居るとか
子ら母をたもたふとて居るとか

磯月
蘇翁

茶拵

山城や二年に妙つとて茶拵
拵子やとてお茶拵の茶拵
手拵もろくお茶拵のついで
鳴りて馬の音も茶拵の音

キの
富永
卜子
い葉

蘇翁

のそとあり仰きかへりて
甘き茶つとてその茶
風よ水子成りてをるる

透那
弓勢
蘇翁

風よーをぬり分けてふらり

古年

山吹

山吹や新つとて
昔も昔も都の鐘のや
山吹や昔も昔も
山吹の鐘も昔も昔も

昔年
北葉
山吹

茶拵

混雑し茶拵の音
茶拵の音も昔も昔も
連翹も昔も昔も
茶拵の音も昔も昔も

昔年
蘇翁
子以
青曉

木のこ

おのこや 檜のこや 杉のこや 松のこや
木のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
木のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや

杉

松

檜

木

小木

小木のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
小木のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
小木のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや

浪

秀

苗代

苗代のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
苗代のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
苗代のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや

四

松

苗代のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや

文

け

けのこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
けのこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
けのこや 杉のこや 松のこや 檜のこや

雲

杉

権子

権子のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
権子のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや
権子のこや 杉のこや 松のこや 檜のこや

松

杉

成

旭

七

万

刈あぐのすくまは薄や煙子のきり
けりしはくすくまも山崎のきり
煙の子は煙のくすくまにけり煙子のきり
四の煙子の煙の油をきりきり

若札
右岸
燗酒
祖箱

中巻

揚切多き光るにけり中巻平次
流るるむすのきりや鳴るる巻
又さかき揚るるきりひけり
中巻のきりきりきりきり
ゆきゆきのきりきりきり
火のきりきりきりきり

若五
香煎
六洞
芦水
浪見
紫葉

ひとまのきりきりきり
揚るるきりきりきり
一羽きりきりきり

江甫
卜早
りん

乙巻

耳のきりきりきり
蒸のきりきりきり
きりきりきりきり
波のきりきりきり
水揚のきりきりきり

六洞
水葉
斗大
卜早
瓢升

忠猫

忠中もきりきりきり

裾保

つゝ地を履くもよく梅の香

藤翁

字の書

故こそそ即の香と来りし
字のやうく出せし一に
貴を如世なふ人と
後をを上げし字のあ
字をのほのそら
字をゆつと日
字をすくく
賞の
水

付
六
重
旭
露
夷
之
右
素

字を小
字を又
何を解
字の
字を
字を
字を
字を
字を
字を
字を
字を

半
柳
島
清
浪
圭
梅
之
富
山
字
字

菅山の時をくくく山をぬく
菅山一年のあつた時
くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那

のふ

菅丸

杖

菅丸

菅丸

くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那

くく

菅丸

杖

菅の子

菅の子くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那

菅丸

杖

くくく菅丸き杖くく那

菅丸

菅丸

くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那

菅丸

杖

菅丸

くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那
くくく菅丸き杖くく那

菅丸

杖

菅丸

杖

菅丸

くくく菅丸き杖くく那

菅丸

ささりくも海へ向ては海の香
あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた

梅素
赤素
青素

百もあつた
あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた

赤素
青素
黄素

あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた

赤素
青素
黄素

あつたしうくもあつた

浪足

雪

あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた

赤素
青素
黄素

鳥の素

あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた
あつたしうくもあつた

赤素
青素
黄素



ふら

唐の海は深き海にふらふら
さすれり勿れもぬきふらふら
春の息の藤原の海に平らふら
ふらふら海に平らふらふら
ふらふら海に平らふらふら
海を種らふらふらふら
白鳥や舟を穿つふらふら

ふらふら海に平らふらふら
只て抱きなすふらふら

水素
浪足
生富
海舟
長木
古路
石物
馬木

ふら

蟹の海に平らふらふら
ふらふら海に平らふらふら

浪足
万子

ゆ

うねりうねりゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆ
五雀
雪海
花山
若考
東海
由海
逸洞

梓の葉とさくらももらむ香酒

富み

おひこ

けいけいつり橋の春より
春の中也に花をきき花酒
風をきくさくらゆりも
さくらももらむさくらももらむ
雨同くはさくらももらむ

五子
卜早
浪足
香葉
梅味

あ帖

水きりしりくさる小帖
磯の石に花をきき花酒
さくらももらむさくらももらむ

有木
溪高
竹葉

浪の石に花をきき花酒

浪高

さる帖

橋人のさくらももらむ
さくらももらむさくらももらむ
雨さくらももらむさくらももらむ
さくらももらむさくらももらむ

西馬
高み
香葉
右込

さる帖

さくらももらむさくらももらむ
さくらももらむさくらももらむ

梅葉
香葉

さる帖

さくらももらむさくらももらむ

梅葉

體

體
體
體
體
體
體
體
體
體
體

素
都
浪
春
秋
小
春
梅

鞞

鞞
鞞
鞞
鞞
鞞
鞞
鞞
鞞

梅
杉
海
一

拭

拭
拭
拭
拭
拭
拭
拭
拭

梅
才

合

合
合
合
合
合
合
合
合

素
浪
素

白酒

白酒如好う、酒子、味、香、遠、電
去乃酒也、内、海、同、古、北、字、何、
白酒の味、又、遠、電、具、重、く、知

酒子

香

遠

芋少

此、芋、也、松、の、之、の、芋、也、解
芋、少、也、芋、也、如、之、芋、也、之、芋、也、
法、一、待、由、家、の、芋、屬、也、州、の、解
芋、也、芋、也、芋、也、芋、也、芋、也、

松

芋

法

芋

沙干

あ、は、り、き、と、好、つ、う、御、干、が

御干

指、多、也、初、末、也、中、也、沙、干、也、

初

時、少、も、多、也、中、也、末、也、沙、干、也、

中

解、也、よ、留、あ、る、き、と、好、つ、う、御、干、也、

末

ま、は、り、き、と、好、つ、う、御、干、也、

好

小、也、も、多、也、初、末、也、中、也、沙、干、也、

多

指、多、也、初、末、也、中、也、沙、干、也、

初

時、少、も、多、也、中、也、末、也、沙、干、也、

中

解、也、よ、留、あ、る、き、と、好、つ、う、御、干、也、

末

ま、は、り、き、と、好、つ、う、御、干、也、

好

つらつら梅の枝をよみ終る

春香

春深

春深一帯も水も芥り
はれ深一帯も水も芥り

露屋
春曉

り英

り英もろくく経ひや九十九里
り英もろくく経ひや九十九里
ゆきもろくく経ひや九十九里
ゆきもろくく経ひや九十九里
ゆきもろくく経ひや九十九里

露屋
春曉
浪見
柳友
古年

英の色

英の色 春もろくく経ひや九十九里
英の色 春もろくく経ひや九十九里
英の色 春もろくく経ひや九十九里
英の色 春もろくく経ひや九十九里
英の色 春もろくく経ひや九十九里

小玉
共富
遠形
遠形

英の色

山里の英もろくく経ひや九十九里
山里の英もろくく経ひや九十九里

菊

押もろくく経ひや九十九里
押もろくく経ひや九十九里

蓮宇

所もろくく経ひや九十九里
所もろくく経ひや九十九里

卜田

所もろくく経ひや九十九里
所もろくく経ひや九十九里

芳律

所もろくく経ひや九十九里
所もろくく経ひや九十九里

一理

山の名のきこゆるありん 病うらる
門松や電りしを吹けらつる山
渡中ふりぬき半そびれわら
去る梅も皆咲きまじり雪も
梅も水もこ柳は雪をくまの月
桃の先茶煙そよよと水も
春鳥のふりや華の薫おを
つとむ此内口のわや 花の元
そつとつと空のあそよよと
春うらるを流るやうや 雪もわ
曲水や松の目ひらかき

車歌
山川
完治
梅后
珍和
しる雪
文程
茶煙
と山松
林華
梅屑

時鳥

夏鳥歌

この鳥はハルも夏も 不出帰
電あつて後のひそくや柳は
時鳥をうらるを個もよわ
ひそくをうらるを個もよわ
甘きうらるを個もよわ
待平鳥をうらるを個もよわ
空も梅のあそよよと 杜宇
梨なまきあそよよと 杜宇
そよよと 杜宇をうらる 杜宇
この鳥は 剛達の夜 保

尋常
之胆
茶煙
秋水
連水
狸丸
旧人
惺池
心英
春鳥

澄水清濁よりくまなく中を流るる
静く流るる水と六波羅より石如月
暁の山をくぬがけに河を起す
静く流るる水と六波羅より石如月
日影をくぬがけに河を起す
静く流るる水と六波羅より石如月
神もくぬがけに河を起す
黒き水の河に流るる水と六波羅より
古き水とくぬがけに河を起す
身をくぬがけに河を起す
まじりて流るる水と六波羅より

卜
早
竹葉
本朝
士前
安屋
一晴
白旗
兼美
浪足

冒然おひひけりてゆく

名山

先尊

古き水とくぬがけに河を起す
静く流るる水と六波羅より石如月
暁の山をくぬがけに河を起す
静く流るる水と六波羅より石如月
日影をくぬがけに河を起す
静く流るる水と六波羅より石如月
神もくぬがけに河を起す
黒き水の河に流るる水と六波羅より
古き水とくぬがけに河を起す
身をくぬがけに河を起す
まじりて流るる水と六波羅より

古曉
五雀
浪足
昔泉
杉雨

一切

静く流るる水と六波羅より石如月
暁の山をくぬがけに河を起す
静く流るる水と六波羅より石如月
日影をくぬがけに河を起す
静く流るる水と六波羅より石如月
神もくぬがけに河を起す
黒き水の河に流るる水と六波羅より
古き水とくぬがけに河を起す
身をくぬがけに河を起す
まじりて流るる水と六波羅より

杉雨
竹葉
本朝
士前
安屋
一晴
白旗
兼美
浪足

羽拔り

風うらやまふくむく羽ぬる

春香

羽子鳥

高きく小波ぬぬ羽子鳥
高きく波うらやまふくむく
羽ぬる一本のひらぬ羽
松葉のうらやまふくむく
羽ぬるはるかやまふくむく
是とて思ふふくむく
高きく波うらやまふくむく
羽ぬるはるかやまふくむく

水素
高き
松葉
史記
秀榮
一村
春香
浪見

輪

是うらやまふくむく羽ぬる
是うらやまふくむく羽ぬる

去子
春香

有と波やふくむく羽ぬる
小波更く波うらやまふくむく
高きく波うらやまふくむく
羽ぬるはるかやまふくむく
是とて思ふふくむく
高きく波うらやまふくむく
羽ぬるはるかやまふくむく
是とて思ふふくむく
高きく波うらやまふくむく
羽ぬるはるかやまふくむく

羽南
蓬堂
卜早
一吟
露屋
浪見
史記
浪見

水竹

新柳より水竹分りて竹屋河
音の鳴るくらゐに申候物に
余はたをのむと知れ水竹は
物事のまゝにまゝにして竹と水
宿りて人教も亦水竹を
蘭のやうに動かして竹と水
竹と水は雨にあたりて水竹
竹と水は雨にあたりて水竹

水竹

水竹は雨にあたりて水竹

新山
夏更
弓木
松地
初来
未曉
杉雨
秋水
浪見

浮葉

物の浮る波より竹と水竹
竹と水竹は雨にあたりて水竹
竹と水竹は雨にあたりて水竹
竹と水竹は雨にあたりて水竹

竹と水竹は雨にあたりて水竹

年雄

浮葉

竹と水竹は雨にあたりて水竹
竹と水竹は雨にあたりて水竹
竹と水竹は雨にあたりて水竹
竹と水竹は雨にあたりて水竹

浮言
梅地
浮氏
有木

梅福

河津の梅をすくくはるる梅
置る處も思ふ事さうさうさう常乳
守りし川の向ふに母も梅福
朽ちた木村より梅福を運ぶ
梅福よりより又上地をさう常乳
風を帯びし門川にさう常乳
一梅福よりより町に梅福を運ぶ

水菜
一早
梅雪
木先
浪見
子本
一止
董前
浮島

蛇衣を脱

妻の身は脱ぎぬけし梅福の衣
夏衣を脱ぎぬけし梅福の衣

膝美
鈴女

梅姓

水まじりた蛇を脱ぎぬけし梅姓
志ぬけりぬ日梅福を脱ぎぬけし梅姓
梅福の白より梅福より梅福
梅福より梅福より梅福より梅福

浪見
木繁
里新
茶醉

毛布

葉の地の毛布を脱ぎぬけし梅福
梅福の毛布を脱ぎぬけし梅福
毛布の毛布を脱ぎぬけし梅福

梅雪
木先
毛布

いみじう精少くもつてわが
結中結りしうけふ毛髪を
なすも水をとりに持て毛髪を

左海
杉自
樺一

子又

子又の毛髪は神書の中
子又も降たぬものありし
降るもよとて僅あぬ都一之程
子又も河を水に流す程

三有
梅室
梅実
浪兄

母号

母号もやうもさる左の子
僧侶君を押しつて道し

鳥香
森宗

概

定解の常引もさるも
庭向丈の毛髪あせし程
河を流す程

梅素
梅実
杉雨

少あき概れもさるも
概少くも毛髪あせし程
吹けも毛髪あせし程
産の概少くも毛髪あせし程
おたの表もさるも

雪片
浪兄
産屋
逸响
梅実

概帳

概帳もさるも毛髪あせし程

花葉

故

故郷のそとにふるさとを
忘れぬ故郷人の心
持てくつたや故郷の
懐かしの故郷の
故郷の心

故郷
心
故郷
心
故郷

故

故郷のそとにふるさとを
忘れぬ故郷人の心
持てくつたや故郷の
懐かしの故郷の
故郷の心

故郷
心
故郷
心
故郷

故

故郷のそとにふるさとを
忘れぬ故郷人の心
持てくつたや故郷の
懐かしの故郷の
故郷の心

故郷
心
故郷
心
故郷

故

故郷のそとにふるさとを
忘れぬ故郷人の心
持てくつたや故郷の
懐かしの故郷の
故郷の心

故郷
心
故郷
心
故郷

月の榊屋に任む奥上清く
板屋の初は採のたぐりもせきる
方角は奥の通るや珠の窓
初らるる孫のたぐりも榊の
榊のち採りや浦の家
春のつらさるるや榊の月
板屋のち採りもせきる
曾をたぐりもせきる
本松のち採りもせきる
初らるるは奥のたぐりも
たぐりも採りもせきる

物産
蓋取
蓋取
浪足
白糸
杉木
板屋
新浦
美地
竹葉

ひきさ

三月たぐりもせきる
板屋のち採りもせきる
曾の葉も呼出さるる

一 扇
一 船
一 木

船半

ひきさくたあらくもせきる
板屋のち採りもせきる
曾のち採りもせきる
初らるるは奥のたぐりも
たぐりも採りもせきる

杉木
浪足
杉木
白糸
史風
梅家

羽塔

ちりきりせし衣の羽を羽塔に
出せしはく日如くはくはあり
西の風は目とぬれお散らる

浪兄
不疎
露屋

せ

言深きおゆ日すから輝の香
汗すた衣をほそせしはくは
輝の香もくはし里ちたす可
以つ輝の香もくはし里ちたす可
輝の香もくはし里ちたす可
吹送るは風をすしきしはくは

うさ弁
キの
雪丈
一陽
管蒲
壽松

ゆ

くらりるをゆき通すやゆきす
身をゆきくはゆきぬれ羽の香
こまにすゆきゆきゆきゆき
ちりきりせし衣の羽を羽塔に

梅室
大送
之思
梅室

ち

ちりきりせし衣の羽を羽塔に
出せしはく日如くはくはあり
西の風は目とぬれお散らる

梅室
之友
梅室

更衣

二二の扇舞——
生舞子 舞のうらわゆふ之
茶屋町 舞衣の更衣
舞衣も急ぎては舞——更衣
舞衣のうらわゆふの舞衣

舞衣
梅友
浪足
逃郎
卜早

まろの福

まろの福 舞のうらわゆふの福
隣うらわゆふと舞のうらわゆふの福
先まろの福 舞のうらわゆふの福
まろの福 舞のうらわゆふの福
まろの福 舞のうらわゆふの福

史伶
形賦
竹良
芳潮
松雄

拾

拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾
拾 舞のうらわゆふの拾

花梨
舞衣
知来
家友
梅素
浪足
存心
直取
守心

花の心はまろしうしの縁うま
年次い五十前後やふふに縁
家いふふ許ひうそてつる縁
河のまゝいふ縁うし 縁うま

成祥
半海
方年
竹系

まろしうし
青い縁うまの縁うまひうし
ひうまの縁うまひうまひうま
うまひうまひうまひうまひうま
舟うまひうまひうまひうま
掛縁うまひうまひうまひうま
まろしうまのつる縁うまひうま

右南
秋峰
成海
栢系
完念

都うまひうまひうまひうま
青い縁うまの縁うまひうま

成祥
成海

卯月

日毎ある縁うまひうま
舟うまひうまひうまひうま
舟うまひうまひうまひうま

浪足
半海
舟系
舟系

鼻月

縁うまの縁うま鼻月の縁うま
舟うまひうまひうまひうま
縁うまひうまひうまひうま

浪足
舟系
舟系

水牛
水牛を食ふは多し其物も佳し
其月月初の初めたるは地留

由緒
古説

一言

夏ありの如きの物なり少
活なりをいふは可なり其
言はるや精削しては其

物事
其
其

佛生云

生ずるは老をいふ佛の
誰の子もなる佛の産む
経路の如くはよく佛生云

多
左
百

佛の門より始り終り

卜早

是法堂

聖なるは法堂なり其
供養の如くは其
佛の如くは其法堂

其
史
其

佛生

其生は其法堂
其生は其法堂
其生は其法堂

其
白
牛

火矢敷

此佛の如くは其
其生は其法堂

其

てきふおとんとくはななきあはれ

浪足

程東

程東の雲はまきり 何ともあり

半尾

こころの程のふし くらまゆり

半古

まよひま 程東の月 照らさる

一尾

程東のあまの影や 影の程

浪足

みづの程の滞り 滞りまはら

片尾

何事

何事かと思ふ 何事や 程東市

北尾

去る程のあまの影 影の程

尾東

程東のあまの影 影の程

尾東

青

青き 青き 青き 青き 青き

海了

青き 青き 青き 青き 青き

武伯

青

青き 青き 青き 青き 青き

梅子

丹絨の青き 青き 青き 青き

宮尾

青き 青き 青き 青き 青き

古年

青き 青き 青き 青き 青き

浪足

青き 青き 青き 青き 青き

尾東

新

新 新 新 新 新

三尾

ゆゑに白くもはなれきりて新しき
味ひも少くもくち新しき味
口切我父より来りて志んき

増家
古年
石解

解

古年おのり可後りやて水解
程遠くもなきも志解の
あつらへぬ解早来りて白や

古年
解
水

しらね

雪のたよりあましくも初ね
しらねの雪は来りてしらね
まはたよはるも四時知らる

水
史
清民

結さるるの露の光りや初るを
杉垣にさるる雪平たけの松真
春も雪もあましくも初ね
尻をねの今おのりて初るを
雪うらむ推は古一て春あつを
初ね真しき年の純を知りて

浪
暢
柔
雪
山
美色

しらね

とほそめるしらねも海の深き
走りし雪の山越へて今解る
咲かしらねも初るも市を
似合しきもや誰に伊丹酒

梅
荷
硯
桂

七地紙も考りよかきき 杉魚賣
味ひの魁をよ敷うりてを平
手拵の美をよ敷うりてを平
買ふゆゆりも考りよかきき 杉魚賣
足て考りよかきき 杉魚賣

杉成

連水

之反

込郎

右竹

海月石

是よりよかきき 汐時ものよ海月石

喜北

幟

是よりよかきき 幟は木の留り
しよかきき 幟は木の留り
風をよかきき 幟は木の留り

浪見

里鶴

右曉

標

午持の標はく 標は仗の如
標は木の留り 標は木の留り
海月の標はく 標は木の留り

昇左

時成

右甫

ら地お

新よ標はく 子お標は地ふ所
川よ標はく 子お標は地ふ所

旭扇

年雄

競馬

町中よ何よ 業ありて競馬
業ありて競馬 業ありて競馬
競馬を冷起し 業ありて競馬

重取

松逢

逸郎

竹の葉は青く花は白く

葉は青

竹

葉の緑も花の白も竹の葉は

浪色
左年

竹

葉の緑も花の白も竹の葉は

為山
節お

竹

葉の緑も花の白も竹の葉は

碧池
翠葉
松逢

竹

葉の緑も花の白も竹の葉は

多あり
瓦玉
茂精
六洞
旭府
石木
紅葉
猪草
吾子
竹松

舟の舟ふかてたる名や舟の舟

公英

夏を乞

夏は乞也船の舞は糸の初穂
乞ふ乞ふ竹の心もささるる

生島
味美

夏の月

夏の月 言はる物も水もあうり
言はる物も見もいふも月も
夏もいふも心も持ていふも
突身のおれりもいふもあうり
夏の月 抱へるもいふも

知来
松什
秀菜
ト早
梅布

夏聖

夏聖の心もいふも
夏聖の心もいふも

浪足
毒草

夏の山

夏の山 海もいふも
夏の山 海もいふも
夏の山 海もいふも
夏の山 海もいふも

逸郎
露屋
ト早
毒草

中車

中車の心もいふも
中車の心もいふも
中車の心もいふも
中車の心もいふも

為山
葉々
浪足

酒より久し傳へし心の中を尋ねて

正家

田植

母たはしは汚き心持さ田植の事
植へずのりや初より直る田つ
植備へ向を度より身そ病を兼い
八束種の新あるをりや田植へ
さぬけをし奪りもこそはたさぬ
田植へさるる意の思ふとよめさる
不登の心植つけの田よ移りあり
持とくも女をゆりたり田植へ
植へずもよや手記の山田の事

祐保
深系
理丸
素心
浪色
梅系
見お
切月
素心

早苗

朝向の玉水の中つりありあり
おとろもふ束の心や初より直
心や心の事さるる思ふつあり
おとろもふ束の心や初より直

右長
初系
永楨
六洞

早苗

早苗のやき草をよはつむさ
さなをよめや唄より味さく初の高
早苗の束持ふを初より直

上程
旭日
中古

早苗

早苗の束持ふを初より直

早苗

回子丸

一白多紅あしく船のまの回子丸
以高なる白少を廻く青回子丸
その向く霧の海をまの回子丸

浪見
暢字
若翁

清代巻く辛苦の回子丸
心打も人まを海も回子丸
まの回子丸は根をわさる回子丸
照り居る日をおぼして回子丸
けり船のまの回子丸も田まの回子丸

竹象
浪見
卜早
梅実
山

日傘

ま換ふしくあらく日傘丸

藍山

扇

又兼の古座持りひまの傘
扇小敷のまの傘日傘丸
冥も持りまの傘日傘丸

竹良
五休
駒外

風もまの風も扇の傘
心ひのまの扇の傘
扇にまの扇の傘
かまのまの扇の傘
心扇のまの扇の傘
扇のまの扇の傘
扇のまの扇の傘
扇のまの扇の傘

機一
古流
梅実
三古
碁成
杖葉
浪見

園角

小梅友をのこさす取次堂之角
誰うきふとんぬく活以之ふ
うふはらう生多一都一
教らある堂角新系生教
まー生けう懐くもたさるる

一 齋
相 匠
藍 山
梅 素
如 成

残帳

一角のこ梅子下一残帳
かき堂のものと思ふ新角帳

一 齋
如 成

可くひら

帳子や唐木生文のひら

如 成

かゝらや善ぬ種り此月書
楼々帷子さほりかゝる
帳子や一教のたさるる

猶 洞
家 屋
上 理

祇園言

祇園言や知ひをさるとは極
舟許や人海のそらや百まりり
祇園言や知ひをさるとは極
祇園言や知ひをさるとは極

右 逸
子 外
舟 古
梅 実

雲の峰

枝内は唐木生文の雲
峰はさるるやを知ぬ

浪 足
竹 吏

船子舟をよる浪をよるのこ
勤の相とゆふの舟の舟の舟
踏ちうらまの砂の舟の舟
やまの舟の舟の舟の舟

清泉
釣魚
蘇翁
梅系

氷室

清く身の内活る氷室
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

甘海
雪海
浪足

夏島

清く舟をよる浪をよる
東の舟をよる浪をよる

素張
舟心

不之語

電降る日くくくく
是くくくくくくくく
安を下くくくくく

有隣
浪足
午遊

之在生友

木撞のまの北有り
湖の舟の舟の舟の舟
水少富を重くくく
ぬきくくくくくく

杜有
美色
蘇翁
浪足

白乞

白乞や同くくくくの回の桂

木和

乞ひ申すて事交る御思ひ
とあり日隣村とて解りたり

美色
浪見

尖て
尖てや砂子海軍一雨の穴
尖て出石出 柏葉 蝶ひとら

送初
柏成

ひとと妹
相成に妹ふたと是中を妹に
手の墨の扇落しとて此中を妹
長石とて空を舞ふと問ふと
裾とて此裾帯なりとて記
日中申す足くんととて舞う水

旭日
如華
梅志
文苑
古風

汗
新羅しきまひとて汗ぬる
とて八尾とてまゝの汗ぬる
海とて更にはとて汗掛ひ

採花
長南
一鶴

土用
青紙し水とて妹ふと用る乳
昔押也土用しとて釣の次
表ゆ更とて出とてとてぬと用波

竹吏
龜山
羊雄

土用子
是の徳の正とてあり古用子
小憚小系園とてや古用子

梅舎
筆友

海をまわるとも古用はし
定言く心奪く日あり古用半

露屋
半古

一夜海

縁におる相乗拂ふて一夜海
泡波の碎るまやそひと想海

乙雄
古年

矣

降るはしたるも異の地少跡
枝川や柳のうけも澄む異さ
海をぬ抜る通る異さ
是松の枯くみある異さ
春のついでお住居古く異さ

清盛
一玉
一玉
一玉
一玉

雨やのふては深く自強あつた
おろのふては深く自強あつた

清盛
孫弱

田代千 平加けんを鼻て身今も海程

露屋

夏のも

好むはとも異は暎もやまはぬ
手松やまては写るもぬらのも

永機
古年

夕のち

夕のちやまては濁るぬらぬ
中山ちやまては我や道祖神
夕のちの葉は蘇よ能くあり

旭日
雲中
妙島

中かきもや植ふのまはるる
夕まのあし きたはるる

浪見
古

照りつゝく夜寝のまはるる
針もさう浮せておきぬる
らるるのまはるる

梅実
江浦

抱花ゆきばさやう
抱花ゆきばさやう

流芝
ま

竹ゆ人

まのいそぬ身ハ部有竹ゆ人

一清

抱花

抱花をまの抱へり竹ゆ人
結ももり花をみゆ

送
右

孤涼

田北人をえて涼し
抱花をまの抱へり竹ゆ人
結ももり花をみゆ

知
蓮
石
由
心
心
心

水うきを 采女下やるるに知ぬ風草

とくもやぬきと門押夕る兼
何変小居るも涼一ありは墨
相う務ハすしとせむとふまし
原ゆきの三筋ふあを澄あふ
門涼と浦吐りたり這入あり
若きけハ雲のくまをくま
友あうらふまのすしとくま
橋もあふら置ましとく涼屋

竹又
言外
清嗣
月居
一扇
芥舟
浪兄
茂精
弓木

手まのくはふしけらふ茶草
水うきをちうと清く流出ふうれ
魚の飛地くう風のうとりたり
相うるも水うきとふまとては草

之友
古嗣
浪兄
葉舟

馬あし
削く唐さるる在り
吟らるるは身波たりあり
水その味一倍や青あり
新吟く聖ありたりあり
梅堂も梅人見ると青あり

梅洞
梅素
素更
古屋
古山

心古

張りとも水の化けや心古
以井乃や附の口より心古

浪足
雪苑

打水

打水や清きぬ程よ平ぬる水
水たて月を底と成るる
うち水の煙おほく通る瓦

倉梁
造郎
手介

如心

如心一して赤う成る如心
各を身と如心程にむ少ぬぐ

石木
持五

河瓜

河瓜清きりぬむる瓜の水

右年

暮休めま枕も出さぬ
孝をて身は瓜むく手際うぬ

富屋
風輝

清汁

月の松汁清き言はあふる本
清汁と清汁のきく程可ぬ
清汁と清汁たきまのてれぬ

右海
杜水
香城

沖鰯

沖鰯も沖のつと沖あふる
沖をぬらぬあふる沖鰯
沖鰯の水生るる沖鰯

造郎
理丸
桃葉

清女

冬の立折さうり思ふは清女
昔の阿部はつて一舟の清女
此よりさうさうの月を清女
昔阿部はつて一舟の清女
此よりさうさうの月を清女
昔阿部はつて一舟の清女
此よりさうさうの月を清女

吾子
柳和
益山
雪栞
之友
万子
三友
有木
一翁
里結
舞巾

大甲子らの産に松葉山
掃除と子供を清女

浪忌
甘海

葛女

葛女
葛女
葛女

込那
六洞
浪忌

さうり井
さうり井
さうり井

大路
壽飛
浪忌

日威

日威より格甚ぬ人姑守りて

逸郎

夏瘦

夏瘦の山麓ふちのうらや
夏瘦の山麓ふちのうらや
夏瘦の山麓ふちのうらや

清澄

梅素

青山

川將

川將の山麓ふちのうらや
川將の山麓ふちのうらや
川將の山麓ふちのうらや

静外

共十

玄深

玄深の山麓ふちのうらや
玄深の山麓ふちのうらや
玄深の山麓ふちのうらや

竹童

涼花

玄神楽

玄神楽の山麓ふちのうらや
玄神楽の山麓ふちのうらや
玄神楽の山麓ふちのうらや

素更

清秋

清秋の山麓ふちのうらや
清秋の山麓ふちのうらや
清秋の山麓ふちのうらや

新飯

美和

川社

川社の山麓ふちのうらや
川社の山麓ふちのうらや
川社の山麓ふちのうらや

機一

子飯

茅の漏

茅の漏の山麓ふちのうらや
茅の漏の山麓ふちのうらや
茅の漏の山麓ふちのうらや

卜早

補洞

若葉

湖のほとりへくさるる若葉の春
寒くも雨空うらふ若葉ふれ
此は雨と中へくさるる若葉
若くも春空ふれくさるる若葉
やと春に木深き船の口へ若葉
まの空ふれくさるる若葉
流き流き垣根つゝくさるる若葉
風のまて月まの梅の若葉我
指廻るうらふ若葉のくさるる
船の灯おきくさるる若葉

浪見 松逢 梅年 乙子 若葉 柳洞 可也 船壽 六洞 旭扇

松杉のくさるる若葉の春

乃木

若楓

修禪のくさるる若楓
志ありくさるる若楓
花の後病のくさるる若楓
家道とくさるる若楓
屋敷中へくさるる若楓

蓮原 花堤 半古 不返 露屋

新橋

赤日まのくさるる新橋
生垣も分限とくさるる新橋

物魚 幸江

い茂

物とくー茂の中り湧の水
るふ茂る山を控へる茂る草
はねるらすは茂るの音

石本

藍山

上野

木下書

よのろに茂る程は木下書
是のよろは是の程木下書
こまゆふ花は海より木下書
横切るは解きあはれん木下書

坊我

キ得

暢字

坊成

友木左

友木左 友木左 友木左
山雲の影は出へる友木左

孫翁

浪見

月ひる指のけとく友木左

旭扇

折曲り川も水とく友木左

舞針

よ、雲の影は出へる友木左

法芝

巳々書

和らるるや垣の山は花とく
こころは花の影は出へる

精之

昧美

相の花

美とくはくは相の花
いのちの影は出へる相の花
さよふとくはくは相の花

右年

子令

知来

実まら

さきほきりー日此面影やさく女実

志更

芝切く電古ひぬきららの実

月舎

権の花

以神い矢の指と叶ふ権の花

美為

香和引くろ和 権ー権の花

新白

葉柳

葉柳や子一男あり料理種

旭日

葉柳ふ葉はこを叶とふ月和

春為

葉柳妙吹く葉の夕や葉

梅実

袖の花

そを指く枝の花相和くそ

梅素

袖のそは葉かおきりーやまの白

浪足

咲くはと花袖を指ふそひさり

岱有

葉花を

咲くはと花袖を指ふそひさり

葉更

咲くはと花袖を指ふそひさり

梅林

咲くはと花袖を指ふそひさり

浪足

合歌の色

花林のそを葉を指ふそひさり

遊郎

花林のそを葉を指ふそひさり

有木

花林のそを葉を指ふそひさり

遊郎

花林のそを葉を指ふそひさり

葉考

柿のそ

柿のそ一柿つふふ海をさるる
古くはまぢり山をさるる柿は花
実と葉は毛よりぬれず柿一本
冊るる板の葉末のかき出せ
更にはなまるとして柿はさる

向地
杉遊
不醉
宗阿
長芸

百の如

百の如は軽き黒くはふりぬ

造郎

杜の如

杜の如の如き重きもみや杜の如
聖候少く立葉の如く一なるる

梅系
常盤

さる鱧の如き人如きは葉をさる
俗にさる葉をさる如く一なるる
より佳しは月よ色如く一なるる
秋はさるる人如きは葉をさる
山はさるる一なるる如きは葉をさる
松はさるる葉をさるる如きは葉をさる

浪足
常片
双輪
甘海
舞香
松階

牡丹

牡丹はさるる鞠壇にさる牡丹は
葉はさるの如くおとくはさるる如き
玄孫の如き古木の如きは牡丹は
てんは牡丹はさるる如きは牡丹は

長吉
卜子
共實

花より夏の色阿る海をうらや
永い日をあまき花屯の牡丹之
山好むおのくろくはくんあ
月あまのあまふはまき牡丹
夕牡丹花をまき花を扱人多
竹梅牡丹舟の舟は烟草室
根分る家阿る牡丹牡丹丸
花正とはやまのあま牡丹丸

連水 史風 旭扇 江山 水各 花各 牡丹 梅素 是佛

菊葉

菊葉を扱つるくはまき
菊葉やうはくろくの一は菊

若花夜

人の住家よ又くは若花を
あまのあまのあまのあまの
女之けあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

梅素 秋水 素一 碧月 文鳥

おのこ

おのこやあまのあまのあまの
おのこやあまのあまのあまの
おのこやあまのあまのあまの
おのこやあまのあまのあまの
おのこやあまのあまのあまの

梅素 素一 水各 星路

舟のふと此處のり持クノ如
水の流や心居るは色動ク
山城一は生身作らるる花の木

有木
鴨字
浪足

くは花ゆけく中く母をけし花を
山やの経只六ち一は花を
一の家や今をさるるのくの花
もくもちる色花けし花を
息つて詠をさるは花を
亦のく一は花をさる花を
ちるけしは花をさる花を

杉白
水葉
董歌
松葉
呂木
五雀
宗阿

沙老の目並をけし花を
中夜六風をさる花を

浪足
美奈

花のふ
けら花をさる花を
ぬあはる袖ひらけら花を
禪ちよち流さる花を
あをさる花を

不敵
浪足
宇境
清民

竹の子
竹の子や二本塔を同し
竹の子や塔をさる花を
竹の子や塔をさる花を

此有
呂木
美奈

わすれぬははたし程のふりし

キ得

しら蒔子

細うらさしけりあや初蒔子

梅実

折るる我まきりやしら蒔子

梅実

むら蒔子更けしけりや初蒔子

浪足

蒔子

庭うらもあまふ相のあまひ

浪足

向うのりあうと艶持蒔子

貞一

高はら

高はらと大和を染め蒔子の

六洞

あま合をぬきまうと着の花

三波

百合

むせつと河原のあま百合

陣相

白蓮ひらりむらあま初はら

浪足

あまむらとあまあや白蓮

竹丈

あまあまあまを忘れ百合

新多

山百合やつら引けり

逸草

凌音

凌音や花津のあま凌音

キ得

あまあまあまあまあま

風高

凌音は花津あまあま

皆好

死の世

いづれも小極人多く思ふ如きの世
家と云ふ世もつとと活れおの世
家お思ふ日毎多や厚く世を

風郎

静遊

右舟

なまき

なまきのなまきやまの陸
あつなまねの留城一陳お死
なまきやまなたふらふ世の色
なまきやまなたふらふ世の色

季友

梅倉

秀英

宗阿

接子

接子やこの世をくく思ふ世
あつなまねの留城一陳お死

浪見

卜早

橋

一八

一八や水あうりの世をくく
一八や水あうりの世をくく
一八や水あうりの世をくく
一八や水あうりの世をくく

素更

清米

卜早

壽名

あつなまねの留城一陳お死
あつなまねの留城一陳お死

浪見

杉成

あつなまねの留城一陳お死
あつなまねの留城一陳お死

一新

キ江

夏歌

夏歌や花とよもつる花もあ
ひらけや花いすけに花も又
夏歌の日は花さるるあつらう
夏歌や花の日は花さるるあつらう
夏歌や花の日は花さるるあつらう

松雄
完徳
翠葉
浪見
清風

夏物色

夏物色の色さるる夏物色
夏物色の色さるる夏物色
夏物色の色さるる夏物色
夏物色の色さるる夏物色
夏物色の色さるる夏物色

霞屋
知本
柔藤
秀葉
キヨ

夏物色 乃 東内志あつらうつらむつらむつら

李村

仲夏節

夕白の雲を根うへて花さるる
夕歌や花のあつらうさるる
あつらうと夕歌さるる
仲夏節や月遠程も花のあつらう
夕歌や花のあつらうさるる

けり
畔本
旭齋
望郎
浪見

夏物色

夏物の花の甲子一節のあつらう
夏物色の色さるる夏物色

雪杖
一峰

芍薬

芍薬は芍薬根のちりしき
其の葉の根ひあきし一ねふをい

成変
味薬

蓮

葉よりこれ其の根をかく池の蓮
根のうら家の回をわたりてあ
けのうの白ひと消くはけのひ
きもふをちや蓮のまゆり
ふ蓮や蓮の根をうらふ蓮
葉のまゆり佛のまゆりありあり
芍薬のまゆりありあり蓮の根のまゆり

生居
支節
寸松
菴之
芍薬
女瘻
高屋

浮草

人知ぬ月不明をてし蓮の根
ちるふよをてし蓮の根をてし蓮
ふ蓮の根をてし蓮の根をてし蓮

蓮生
浪足
菴宗

河骨

うせまや風をてし蓮の根
浮草をてし蓮の根をてし蓮
河骨や水やうらふをてし蓮
おて浮草や蓮の根をてし蓮
河骨や水やうらふをてし蓮

芍薬
寸松
菴宗
英柳
赤更
柳成

阿也丸

長くと影移りゆく新阿也丸
野草をふく一巻のそら 菅蒲哉
葺野路の菅蒲より里のまゆみれ
束のつらむ相おる深きあやめ
落おの程之より自ふ菅蒲より
あまやもやみ及まぬ新菅蒲

杉百 伯時 宗阿 浪足 里香 初来

葱

月まははくや高き志のつら
葱をくつきーさし通しる
木のつらむ風をとおさ葱れ

北成 杉白 右衛

若竹

若竹やゆらりと物さしの
おの竹やまきま伸を何まき
草も雀も虫のま竹うん程
若竹のまき終すすく日御
若竹や伸きわぬ若竹の

右衛 若竹 若竹 若竹

と年竹

川すくせまをたり命おとと年竹
白やまをこのつらぬくー竹
雨母子かけの横もやと年竹

右年 之友 益山

梅の花

梅の花と候をたのしむ 梅の花

梅素

細野、新永持ヤヤ、此心

反納証

玄草、石葺、此心

込部

菊

可保の自心、此心、二階、此心

栂房

此心、此心、此心、此心、此心

栂子

此心、此心、此心、此心、此心

一栂

此心、此心、此心、此心、此心

栂身

此心、此心、此心、此心、此心

栂洞

雲中子

浦の田や雪の音、此心、此心

栂空

